



Title	日本学生支援機構・大阪日本語教育センターでの日本語教育実習報告
Author(s)	向井, 俊介; チョ, スワン
Citation	日本語講座年報. 2024, 2022-2023, p. 17-21
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/95463
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【日本語教育実習・授業報告】

大阪大学外国語学部日本語専攻では、日本学生支援機構大阪日本語教育センターを始め、複数の日本語教育機関に少人数のグループで日本語教育実習をさせていただいています。日本語教育実習に参加するためには、指定された科目を履修し、模擬教壇実習を修了していなければなりません。その他、休学して海外の日本語教育機関でのインターンに参加したり、国内の日本語教育機関に非常勤講師として勤務したりする人たちもいます。

日本学生支援機構・大阪日本語教育センターでの日本語教育実習報告

向井 俊介 チョ スワン

1. はじめに

筆者らは2023年11月16日(木)から22日(火)までの5日間、日本学生支援機構大阪日本語教育センターで教育実習をする機会を頂いた。筆者ら二人はどちらも日本国内の日本語教育機関で教壇に立った経験が無く、今回の実習が初めての教授経験となった。実習では、さまざまな経験を通じ多くの反省点が見つかった。本稿ではそんな筆者らの実習について報告する。

(文責:チョ)

2. 実習の概要

実習先である大阪日本語教育センターは、独立行政法人日本学生支援機構(JASSO: ジャッソ)が運営している施設であり、同機関が運営する東京日本語教育センターとともに留学生の教育機関である。日本の大学や大学院、専修学校への進学を目指す国費留学生、外国政府派遣留学生、私費留学生を受け入れており、4月入学の1年コースと10月入学の1年半コースが設置されている。日本

語の授業のほかに、進学に必要である基礎科目(数学、物理、科学、英語など)の授業も設置されている。20人以下の少人数クラスであり、週5日間、1コマ50分の授業を6時間ずつ行なっている。教材は大阪日本語教育センターの独自の教科書を使用している。

今回の実習は「授業見学」「教案指導」「教壇実習」で構成されていた。初日は、オリエンテーションで実習の内容や教案指導についての確認が行われ、いくつかのクラスの見学もさせていただいた。2日目からは、授業見学に加え教壇実習の1つである「暗唱・書き取り」のクラスも始まった。これは実習生2人が1日ずつ交互に行った(表1: 太字部分)。日本語の授業を行う教壇実習は18日(月)と20日(水)の2回あり(表1: 太字網掛け部分)、それぞれの実習の前日には教案指導も行われた。

授業は1コマ50分で行われるが、教壇実習は1コマを2人で分けて25分ずつ担当した。

(文責: チョ)

表1: 実習のスケジュール

	11月16日(木)	11月17日(金)	11月18日(月)	11月19日(火)	11月20日(水)
1	A組 見学 (暗唱・書き取り)	A組実習 (暗唱・書き取り)	A組実習 (暗唱・書き取り)	A組実習 (暗唱・書き取り)	A組実習 (暗唱・書き取り)
2	A組 見学	D組 見学	8組 見学	日本事情2 見学	教案指導
3	オリエンテーション	A組 見学	7組 見学	2組 見学	A組 実習
4	実習・教案作成 について	教案指導	教案指導	C組 見学	実習反省
5	日本事情1 見学	3組 見学	A組 実習	教案指導	1組 見学
6	B組 見学	4組 見学	実習反省	A組 見学	A組 見学

3. 授業見学について

今回筆者らが見学させて頂いたのは、初級と中・上級の日本語のクラスと日本事情のクラスである。初級レベルはA組～D組、中・上級レベルは1～4

組、7組、8組でそれぞれ進度やレベルに合わせた授業が行われていた。

3.1 初級の授業について

大阪日本語教育センターでは先述の通りセンター独自の教科書を制作し使用している。初級では『留学生のための日本語初級』という教科書が用いられていた。この教科書の各課のはじめにはモデルテキストがあり、学習者はそのモデルテキストの読解を通してそこに出てくる文型や語彙、漢字を学んでいく。教師はクラスの進度に合わせ、モデルテキストの意味理解を中心とした授業や、文型のドリル練習を中心とした授業などを行っていた。ただし、どのクラスにおいても教師は学習者に発話してもらうことを意識し、新しい文型を用いた口頭での練習問題を多数用意していた。その問題のキューをテンポ良く出していく技術はとても洗練されており、短い時間でクラス全員が発話できるよう工夫がなされていた。また、教師は助詞や発音の間違いを細かく訂正することを心がけているようだった。中級の学生がとても流暢に正しく話すことに驚いたのだが、これはこうした初級クラスでの丁寧な指導によって実現しているのだということがよく分かった。

3.2 中級・上級の授業について

中級・上級では、『留学生のための日本語中上級』という教科書を用いた読解の授業や、別の教材を使用したディスカッションの授業など、レベルや進度に合わせた様々な授業が行われていた。

読解の授業では、テキストのテーマに関する質問、新しい文型・表現に関する質問、新しい漢字に関する質問など、多様な質問を教師が学生に投げかけていたのが印象的だった。学生達はそうした質問すべてに積極的に答えており、そこからはレベルの高さと勤勉さが垣間見えた。また、ある学生の発話に対して他の学生が反応する場面も多く見られ、クラス内の活発なコミュニケーションが授業によって促進されていることが分かった。

上級のディスカッションのクラスでは「医療倫理」というテーマでそれぞれがトピックを考え、それに対する自分の意見を発表する、という授業が行われていた。筆者達はその発表に対してコメントを述べるという形で参加させて頂いた。どの発表も非常に高度で、どんなコメントをすればよいか頭を悩ませるほどの内容だった。授業後この授業を担当する教師に伺ったところ、医療倫理に関するテキスト読解や、具体的な事例が載った新

聞記事の読解など様々な準備段階を経てディスカッションにまでこぎ着けたのだという。ある目的を達成するために教師がその段階をよく考慮し、適切に指導していくことの重要性をこの経験から学ぶことが出来たと感じる。

3.3 日本事情について

大阪日本語教育センターでは、日本語の授業や各専門教科の授業だけでなく、日本の文化や慣習を学べる日本事情という授業も行われている。筆者らも2回このクラスの見学をさせて頂いた。

1 回目は年賀状に関する歴史やマナーについての内容だった。筆者らも年賀状を書くかどうかや書く枚数など、いくつかの質問に答えた。

2 回目は書道だった。お題の字は「道」で、バランスや、とめ、はらいを意識することなど細かく指導されていた。筆者らもアドバイスをしながら見て回った。納得がいくまで何度も書き直す学生もいれば、「もういいです」と言って提出する学生もあり、一人一人の性格を見る上でも良い機会だと感じた。

(文責：向井)

4. 教壇実習について (チョ)

4.1 暗唱文・書き取り

大阪日本語教育センターでは、毎朝1限目に、暗唱と書き取りが行われている。

暗唱は、テキストと対応した会話文を覚え、翌日の朝、即席で決まったペアとその会話文を暗唱し発表するといった内容の活動である。教師は適宜、学生の表現や発音をチェックする。暗唱文は会話形式であるため、適宜アドリブを入れても良いことになっている。

書き取りは、新出語彙や漢字、カタカナを書かせる目的で暗唱と共に毎朝実施されている活動である。前日に指定したテキストの範囲内から、教師が新出語彙やカタカナ単語などを織り込んで文を作り、その文を読み上げる。学生はその文をノートに書き取る。教師は学生の様子を見ながら繰り返し読み上げたり、読むスピードを調節したりする。教師はその後ノートをチェックし正しく書き取れているかどうかを確認する。

筆者は18日(月)と22日(水)に暗唱文と書き取りの授業を担当した。初回は緊張のあまり、学生

の様子を伺うことやチェックすることができず、学生の発表に対する適切な反応ができなかった。また、書き取りは話すスピードがあまりにもはやく、学生が追いつくことができなかったため、何回も繰り返さねばならなかった。また、暗唱文や書き取り文を読み上げる際には視線が下を向いて、声が通らないこともあった。学生とのコミュニケーションがうまく取れていなかったことが初回の失敗点であったと感じた。

2 回目はその反省から学生とのコミュニケーションを重視し、実習を行うことを心がけた。結果、笑いを起こすことや学生個人に合う発話もできたと思う。また、学生が聞き取りやすいようにスピードや抑揚に気をつけて発話することを心がけ、初回より一層良い授業ができたと感じた。

4.2 教壇実習

表 2：実習内容(チョ)

日付	授業内容
11/20	・ 意向形 ・ ～ようと思います 導入
11/22	・ ～ばよかった ・ ～てよかった 導入

授業実習では以上の内容を担当した。学習者は初級であり、大阪日本語教育センターに入学して2 ヶ月ほどしか経っていなかったため、教案を作る際には学習者が理解できるように、既習語彙と新出語彙を適切に使用することに注意した。最初に教案を作るときは、文型を詳しく説明して、淡々と例文を読み上げるような作業を繰り返して作っていた。しかし、大阪日本語教育センターでは文型の説明より何回も発話を繰り返しながら口を慣らすことの方を重要視していたため、学校との方針とは合わない教案という指摘を受けて修正を行った。

また、筆者は2 回の授業ともパワーポイントを使用して授業を行ったが、パワーポイントが学習者にどのように見えるのか、どのように理解されるか、また理解されなかった場合はどのように対処すべきかを考えることが重要であることを学ぶ

ことができた。実際に教壇に立っているとき、教卓の真ん中に教師が立つとパワーポイントが見えにくくなることもあり、機械が思うように動かない場合などの対処も必要であることがわかった。

文型練習のために事前に準備した資料を、学習者がよく理解できなくて答えられなかった部分があった。この部分で筆者自身も慌ててしまい、同じ言葉で説明することを繰り返した。導入がまともに行われず、学習者の理解が最初から間違っていた可能性もあるというフィードバックをいただいた。口頭での説明の質を上げることはもちろん、スライドだけに依存せずホワイトボードなど他の資料も積極的に使うようにしたい。

初めての教壇実習を通して、学生の視点での物事の考え方、見え方や話し方などの勉強ができた。自分の経験からの気づきやいただいたフィードバックをもとにして今後努力して行きたいと思った。

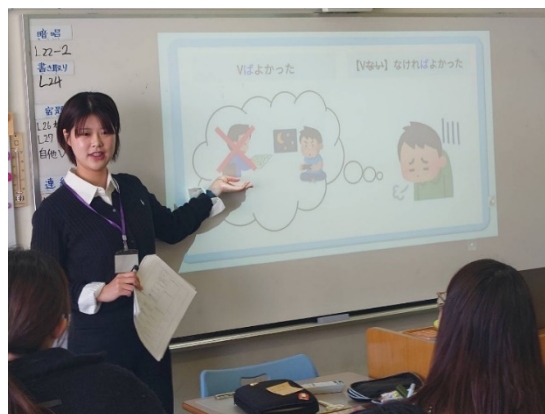


写真 1：実習授業 (チョ)

(文責：チョ)

5. 教壇実習について (向井)

5.1 暗唱文・書き取り

筆者は17 日と21 日に暗唱文と書き取りの授業を担当した。暗唱文では学生のイントネーションを確認したり、助詞の脱落をチェックしたりするのだが、それらの訂正が必要な部分に気づいたときのフィードバックが難しかった。筆者の性格の問題もあるかもしれないが、学生がまだ暗唱を続けているとそれを遮って訂正してもよいのかと迷ってしまった。結果として後からまとめてフィードバックする形になり、授業全体のテンポ感が悪くなってしまったと反省している。加えて、そう

した学生の発話にばかり気を取られて、暗唱文の内容を考えることが疎かになっていたことも反省点である。21日は教室の前の空いた席に座ってもよいか教師に尋ねる暗唱文だったのだが、筆者は17日と同様、学生にはその場で立って暗唱してもらおうとした。しかし、その場で、実際に教室にいるのだから、立ち位置なども考えて暗唱してもらった方が良くと指導教官から指摘を受けた。その通りにしてみると、学生が自ら暗唱文の内容を教室の実際の状況に合わせて変えるようになった。学習者が自分で考えて話せるように促す工夫はいろいろなところにあるのだと大変勉強になったとともに、教科書だけに頼らず、教科書を用いて応用的に何が出来るか考える重要性も認識した。

他方、書き取りの部分でも気づきがあった。事前指導で注意を受けたとおり、書き取りの文章を作成する際は新出語彙や文型、既出・新出漢字、カタカナの言葉を入れるよう気をつけた。しかし、授業で実際に書き取ってもらった文が長すぎたのか、「もう一度言ってください」と繰り返しを何度も求められることとなった。それでも学生全員が頑張って書き取ろうとしてくれたのが幸いだったが、添削時に少し申し訳なく思った。学生の書くスピードをよく観察し、どれくらいの分量の文であれば良いトレーニングになるのか配慮すべきだったと反省している。

指導教官からのフィードバックからは、教師がいかにかこの暗唱と書き取りの活動を重要視しているかという強い思いが感じられた。私もこうした継続的な活動を疎かにしない教師になろうと思った。

5.2 教壇実習

表3：実習内容（向井）

日付	授業内容
11/20	・イ形/ナ形+そうです（様態） ・N/イ形/ナ形+（じゃ）なさそうです ・Vます+そうです（直前） （・Vておきます） 導入
11/22	・イ形/ナ形/N/V（普通形）+（な）のに ・～。ところが、～。 （・～。すると、～。）

導入

教案作成の際に一番悩んだのは時間配分と例文の作成である。両日ともに文型が複数あり、それぞれ導入、説明、簡単な練習をしていくとなると、考えなければならない点が多い。例えば、20日の「～そうです」は、前に接続するのが動詞のとき、眼前でまもなく起きる事象について述べる機能と「遅れそうだ」など予測をあらわす機能があり、それらをその場では説明しないにせよ質問が来た場合に備えておく必要があった。また、こうした質問が来なかった場合でも時間が余らないように例文を準備しておく必要があった。学生の既習語彙に配慮しつつ、文型の自然な使用場面を考えるのは予想以上に神経を使う作業だった。単純な文から少し複雑な文までクラス内のレベルに応じて考えたが、それでも使用場面や使用頻度の点で指導教官から多くの指摘を受け、自分自身まだまだ訓練が足りないと自省した。こうした試行錯誤に加え20日の授業ではパワーポイントを、22日はホワイトボードを使用すると決めたこともあり、その教材作りや板書計画の作成にも追われた。

このような準備期間を経ていざ教壇に立つと、当初の予想とは違った改善点が浮き彫りになった。それは教案の時間配分と実際の授業スピードがかなりずれてしまったことだ。20日は、最初の説明までは良かったのだが、練習の部分で筆者が教案を何度も確認したことや、それでもクラス全員に問題を回していこうとしたことで時間のロスが重なり、当初の教案をすべてやりきることが出来なかった。また、22日の授業でも板書に不慣れだったためそこで時間のロスが続き、最後の方は十分な説明が出来なかったと反省した。指導教官からは「捨てる勇氣」ということで、すべて計画通りにやろうとする必要は無いとフィードバックを頂いた。またその他にも、話し方であったり、教材の扱い方であったりといった動き方の面でのアドバイスや、教室の雰囲気やどう動かすかといった学習者の心理面からのアドバイスを受け、非常に勉強になった。

筆者は以前、海外での日本語教育実習に参加した経験があり、微少ではあるが教壇経験があるという自負があった。しかし、教育機関が変われば教え方も変わるし、配慮すべき点は大きく変わる

ということを今回の実習を通じ痛感した。そして、学生にとって生きた日本語とは何かということを常に意識し、教える内容をよく吟味する重要性を学んだ。無駄のない動き方やクラスの雰囲気作りなど、場数を踏むことで改善される部分も多いと思う。そのためにも教壇経験を積み、より一層自己研鑽に励みたい。

(文責：向井)



写真2：実習授業（向井）

6. まとめ

授業見学では、初級・中級それぞれの授業で先生方が試行錯誤を繰り返し、その中で独自のスタイルを作り上げていることが分かった。話し方や授業のスピード、板書の使い方などどれをとっても意図や目的が明確で、学生達にとっても見るべき点・聞くべき点がわかりやすいのが印象的だった。しかし、それを実際に教壇で試してみようと思って意識しても予想通りに行かないことばかりで、自分たちがまだまだだということが身にしみて分かった。そんな力不足な私達に対し指導教官をはじめ多くの先生方が丁寧で細やかな指導をしてくださり、今まで知らなかった多くの点を学ぶことができた。今回の実習を通じて得られた知識は、今後日本語教育に携わっていく上でももちろん大切な知識であるし、それ以外の場面でもきっと私達を支えていってくれるはずだ。そんな貴重な経験の場を下さり、指導してくださった先生方、そして不慣れな学生の授業を真剣に聞いて下さった学生の皆さんに心より感謝申し上げる。

(文責：向井)



写真3：大阪日本語教育センターの先生方と